

尻別文学歴史の会だより

蘭越町ホームページ版 : 4月号 : (平成29年4月1日/隔月発行)

花一会図書館(地域資料委員会) 編集 / 尻別文学歴史の会 協力

電話・メールアドレス

0136(57)6085(FAX 兼用)

hanaichie@voice.ocn.ne.jp

磯谷郡蘭越町蘭越町880-9

蘭越町コミュニティプラザ花一会

文：行方 洋子（尻別文学歴史の会）

平成26年9月から蘭越町花一会図書館において、月一回のペースで行われてきた「尻別文学歴史の会」で取り上げたテーマをもとにまとめたものです。

蘭越人物往来

第一回 苫米地金次郎

稲荷神社(淀川)の境内に「開拓記念 苫米地金次郎翁碑(子爵 澁澤榮一書)」が立っている。

苫米地金次郎が、ここ後志国磯谷区尻別村大字大谷地(現在の蘭越町)に、300万坪を貸下げ、一家を挙げて移住してきたのは明治23年のことである。

尻別村は、その当時、尻別川の河口付近にこそ住民がいたが、上流内陸に少し行けば、川沿いの細道があるだけのうっそうとした森林が広がる原野であった。

苫米地金次郎は、明治維新になるまでは五戸御給人として青森三本木相坂に住む盛岡藩士だった小山田苫米地の一族であった。金次郎が生まれたのは嘉永6年(1853年)9月27日、兄弟姉妹はなく、明治元年15歳の時に父が亡くなり家督を継ぐことになった。本来ならば、ま

だまだ学問修業に励まなければならない年である16歳で婚姻をさせられ、士族で、農業、酒造業と、家業に多忙を極め俗事に追われ学業を積む機会がなかった。



青森三本木

金次郎が生まれた、青森三本木原は、火山灰土のため樹木が生えず、冬はこの平原で凍死する旅人が多いような土地柄であり、盛岡藩は文政年間に奥州街道を中心に防風林を植えた。藩士 新渡戸伝が、七戸及びほか六ヶ所の山奉行としてこの事業を率いてきた。そして伝が1855年新田御用掛につくや、この三本木の開拓に着手した。広い三本木原には、田畑が少なかった。その一番の原因は周辺の川が低地を流れていることであり、川より高い場所ではその水を十分に利用できず、田畑を開くのは川沿いの低地か、湧水を頼りに小規模に田畑を

作るしかなかったからだ。そこで伝は、壮大な構想を立てた。奥入瀬川から水を取り、三本木原台地に上水して太平洋岸まで達する新しい川を作る。そのためには高低差のあるところは、台地と奥入瀬川が 30mもあるところもあるので上水するには、奥入瀬川の上流に取水口を設け、途中穴堰（トンネル）を通して三本木まで水路を作るしかないと考えた。2年後水路（稻生川）上水が一部完成して米もわずかながら初めて収穫でき、伝の子 十次郎が、都市計画に着手し、成果を上げるが、明治を待たずに若くして亡くなり、新渡戸家の事業は伝とその孫である七郎に引き継がれる。伝は、維新後、三本木新田開発を国営事業にしてみようべく民部省へ赴き、大隈民部大輔に面会してその旨を願い出るが、かなえられなかった。しかしそれにもめげず嘆願を続け、凶作のための難民救助金二千両を借用することに成功したり、斗南藩の移住百軒を引き受けたり努力をして、明治 4 年伝は亡くなる。そしてこの伝の熱意が実を結んだのか、県令 山田秀典、郡長 藤田重明ほか官民一体で企業し、明治 17 年「共立開墾会社」が創立される。その後、開発事業は、しばらく順調に運んだが、第一銀行八戸支店の不祥事により開拓事業は、資金難の危機を迎える。それを救ったのが第一銀行経営者の渋澤栄一で、三本木に渋澤農場を開墾、共立開墾会社を株式組織として増資、そうして三本木開拓事業の継続を図った。それは、苔米地金次郎が尻別村に移住したのと同じ明治 23 年のことであった。

村と金次郎

三本木原の開拓事業が進展を見せる中、金次郎は、苦闘していた。

明治 15 年のころ、金次郎は村の評議員をしていた。相坂は、南部地方の中ではまだ水田が多いほうであったが、面積は大きくなく栽培法が遅れ、冷害に悩まされ、収穫は少なく、おまけに金融機関もないので、小金貸しに悩まされ、農民の生活は概して困窮していた。文化は遅れ、人々は旧習を墨守し、陋習を打破する意気もなく、弊衣粗食矮屋に甘んじて老若男女一家を挙げて常習的に濁り酒を飲んでいる有様だった。また特に冬季は、これといった副業もなく、旧正月から春田畑に出るまでは、飲酒と賭博が唯一の農村の慰安で娯楽だった。明治 18 年ころには、金次郎は村の土地調査を行い、時折行われた相坂川の護岸工事を請け負うなどしていた。村の惨状を目の当たりにして、悲惨な人々の生活を救うことは、自分の天与の使命とを感じるようになった。そして自らの無学に煩悶して、村の小学校訓導にたびたび教えを乞うた。特に、歴史と地理に関して、例えば、安土から江戸時代にかけてローマに行った校倉六右衛門、江戸時代の朱印船船長で台湾で活躍した浜田弥兵衛、その他山田長政、間宮林蔵、近藤重蔵など、特に世界に雄飛した歴史上の人物に並々ならぬ関心を示した。さらに地理も、北海道をはじめとして広く世界に及びシベリヤ、南洋、ブラジル、アルゼンチンなどについてよく質問した。

そして明治 20 年に役場の筆生となるや、村の人々の実情をより具体的に知るようになる。例えば、村民が 1 円未満の租税を納められず財産を差し押さえられ、50 銭未満の未納で財産を公売されるのを見ることになった。いよいよ農村の疲弊を救うための行動に乗り出し

始める。またこの時期に、別の小学校の訓導が米国行きを志し、その熱い思いを金次郎に語り、実際に渡米して行ったということがあり、感激して自らも行動に移す勇気を得た。そのころから頻繁に北海道開墾の話を中心に話すようになっていった。

北海道開拓

やがて明治 22 年市町村制が実施され相坂は藤島と併合して藤坂村となり、金次郎は、第一期村会議員に選ばれたが、一方で、すでに 1, 2 年前から、移住の為の土地選別に北海道の実地視察を繰り返し、尻別村大谷地に大地籍の貸下げ出願をしていた。当時すでに子供が 6 人、村においては相応の地位を占め、相当の資産を持っていたが、全財産を担保にして全家を挙げて渡道する決心を固めていた。ただ、学齢期の子供は、移住先に学校がないので相坂の小学校に通わせることにした。相坂小学校は、設立に自ら尽力をした学校であるが、自分が上の学校に行けなかった思いから、子供たちの教育に対しては人一倍熱心に取り組んだ。学校卒業を待って、次男の造酒弥は、1, 2 年遅れ、三男の義三は、4 年遅れで渡道し、父親に合流し、年下の子供も学齢期には、青森の親戚にあずけ、相坂の小学校に通わせた。

金次郎が、北海道開拓について、訓導の加藤源蔵に語ったところによると、「資力が乏しいから、まず 300 万坪くらいの土地を払い下げて、開墾し、漸次他に及びたい。札幌地方は政府でやっているし旭川地方やそのほかは及びはないが、倶知安はやりたいが払い下げられないだろうから、尻別の大谷地にしたい。北海道の土地払下げにつき、江渡又六氏、苫米地吉兼氏は好意をもって援助してくれた・・・」

明治 23 年一家を挙げて、青森の十数戸を引き連れて、後志国磯谷郡南尻別村の内（当時は尻別村）大谷地に移住した。金次郎 38 歳の時であった。北海道植民状況報文 後志国（明治 32 年）では以下のように書かれている。

「大谷地青森県団体移民 苫米地金次郎は、青森県において同志を募り団体移住を企画。明治 23 年土地の貸付が許可され 14 戸を移す。明治 24 年 30 余戸を移し、現在貸付地の 7 分を成功。」

「一戸につき 1 万坪を配当し、成功すればそのうちの 3 分を苫米地金次郎に報酬として贈り、7 分を各自の所有とする」

開拓は、過酷であった。道なき道を徒歩で刈り分けながら進み、行った先では、巨木を切り倒し、クマザサを刈り、根を掘起こす。熊の出没におびえ、やぶ蚊の襲撃にあいながらも苦勞に耐えるしかなかった。三男 義三は、「苫米地義三回顧録」でこの頃の事を回想している。

「私が大谷地に行ったのは、父の入植から 4 年後の明治 27 年の春だ。八戸中学に入学を許されなかった私は、父の経営する大谷地の農場へ向かった。馬車も通わない頃のこと、函館

に上陸すると馬の背にゆられて磯谷まで。それから馬も通わない細道を尻別川に沿って歩いたわけだ。その頃の大谷地は、時々アイヌが姿を現す程度の湿地帯で、父の家といってもほんのササの家、板敷き、むしろ敷きで、窓も紙を張っただけという粗末なものだった。交通も未発達で、物資も全く不足した中で、金次郎が第一番目の作物として収穫したのは大豆だった。渡道時に、故郷から携行してきた秋田大豆は、北海道の気候風土によく合い、なおかつ大地籍の粗放栽培に適していた。さらに肥料いらずで、地力の消耗も少なく雑草の抑制にもつながる。栽培面でのいいことづくめだけでなく、大豆は、味噌やしょうゆ、豆腐に煮豆と、日常的に必要な不可欠な食糧であった。大谷地は、尻別川やその支流のほとりに広がる低地で、毎年春には雪解け水による洪水に見舞われ、辺り一面すっかり冠水するのだが、



そのおかげで川は、肥沃な土壤をもたらした。

豆はよく育ち、金次郎の大豆から、明治 25 年優良品種「大谷地」として認められ、その後北海道農事試験場十勝支場によって「大谷地 1 号」「大谷地 2 号」などが育成されて、長年にわたって優良代表品種として北海道の大豆銘柄の基礎となった。

このころ、同郷の新渡戸十次郎の三男である新渡戸稲造が、札幌農学校の教授として北海道にやってきた。札幌農学校が、新たな導入作物の適否検査を行い、上川や十勝の農事試験場を設置して品種の比較試験などを開始しだす時でもあったので、金次郎と稲造はどこかで出会っていたかもしれない。

次の年に、上記の通り、さらに 30 戸余りが入植し、明治 30 年第二農場として昆布に 70 万坪貸下げを行い、明治 32 年第一農場の開墾が成功し無償付与されたとき、小作 90 戸余りの大部落になっていた。

その後、さらに天塩国土別村に第三農場として 80 万坪の貸下げを行った。

挫折

無償付与された土地と拡大していく農地、しかしこの間、金次郎の次男 造酒弥が、米の販売・尻別川利用の海運業を始めていた。というのも、上記報文の記述を見ると、北尻別村から 4 里 18 町離れていて、道路が不備であるので馬車を通すことができない。穀類の搬出にあたっては、尻別川の水運を利用するのだが 12 月から 3 月までは馬漕ぎで運ぶ。大谷地から北尻別村まで運ぶのに穀類 1 石の運賃が、30 銭ほどかかる。さらに、農産物の販売は、北尻別村の商人が一手に引き受け、利益を手中にしている。往々にして不当な低価格で売らざるを得ない。尻別川で運搬した農産物も彼らに陸揚げしてもらい、さらに保管をゆだねることになり、作物を作っても利益が上がらない。商店も一軒しかなく日用品は北尻別村や能津登、島古丹まで買いに出向かざるを得ない不便な状況がうかがえる。そこで、造酒弥は、運搬と販売業を始めた。事業の内容は、尻別川の水運を利用して、農場で収穫した穀類、材木、木炭などを岩内(本店があった)に運び販売する。帰りに農場に必要な生活物資を購入する

というものだった。さらに内地（本州）から米を買い付け、海運業にも乗り出した。ところが、明治 35 年、経過は不明ながら、その事業に大失敗するという不幸に見舞われた。金次郎は、次男の借金について何も言わず、自ら苦勞して得た土地を売却することによってすべて肩代わりしようとして決心する。第三農場としての天塩国の貸下げのころはすでに、家運の傾きが姿を現し始めていたようで、どうやら天塩国に移住することで再起を図ろうとしたようだ。大谷地と昆布は、同じ南尻別村で距離的に近いのだが、天塩国は、ずいぶん遠隔であり唐突のように思われるが、三本木出身で新渡戸十次郎の家臣 立花善治の四男である大村長治が明治 19 年に入地した場所であったことから、何らかのつながりがあったのか、詳細は分からない。ただ、金次郎と天塩国との関係を示す書類が残されている。それは天塩の土地の貸付出願を行う以前、明治 29 年、札幌正教会に提出された嘆願書である。明治 29 年 6 月 件名「桜井司祭の定住及び新司祭増立の件につき請願」（「札幌正教会百年史」）

請願の内容は、天塩国増毛で最近、近くの町に人々が増えてきている。ここに伝道者を派遣して布教するのは小樽及び手宮教会信者の本分と思う、と司祭の派遣を要請したいというものである。

さらに北海道は地域が広く、内地の人が来るのもまれで、来たとしても、十分な視察がないので事実が十分に伝わらない。それは、北海道のために残念だと記述している。この請願者は、寿都教会、後志十字教会、作開および黒松内教会の三教会であるが、後志十字教会の署名の中に、ペトリ苦米地金次郎・ニコライ苦米地金太郎・ダニイル苦米地造酒弥・イロデオン山部盛哉がある。金太郎は長男で、山部は磯谷の戸長、警部補を歴任していた人であった。後志十字教会の住所は、磯谷区尻別村大字大谷地となっている。教会があったかどうか不明だが、苦米地家の自宅住所だったと考えられる。

苦米地金次郎達が、熱心な正教会の信者だったことがわかる。入信の経緯はわからないが明治 15 年のころ、寿都町にハリストス正教会の教会堂があった（旧番地、渡島町 20 番）。文久元年に箱館領事館付司祭として着任したニコライ・カサートキンが初めて北海道にハリストス正教会を作って以来、受洗者は増え、一時は寿都の教会の洗礼者名簿に百人を超す信者がいた。しかし明治 31 年ロシア正教会の掌院セルギーが北海道巡回で寿都視察寺時には、集まった信者の数は 10 人程度になっていた（「寿都キリスト教史 実在した寿都ハリストス正教会」）。残念ながら苦米地家の受洗の経緯などはわからない。

開拓して去る

明治 35 年小樽区在住で元道庁属であった添田弼が、字大谷地の金次郎所有地（現市街地の一部）を競売で買い、早くも明治 40 年にはそれを長谷川直義に売却している（「北海道農場調査」大正 2 年）。鉄道敷設と蘭越駅の設置が明治 37 年であり、金次郎は、交通の利便性の恩恵を享受することなく去らなければならなかった。昆布の土地は明治 37 年に、ともに開拓に携わった友、山部盛哉に譲り、天塩国土別村の農場も同年他人に譲渡するなど、北海

道の後始末をして、明治 42 年、先に次男が行っていた朝鮮半島にわたる。金次郎は、北海道開拓を始めてからも毎年、故郷青森に顔を見せていたが、朝鮮半島にわたるときを最後に再び故郷の土を踏むことはなかった。

その後の苦米地家については、長男 金太郎は朝鮮の農事実行組合に勤務し、大正元年 42 歳で死去、次男 造酒弥は、京城府で木材業を営んでいたが、のちに無煙炭の家庭用化に取り組みその事業で相当成功を収めた（京城ゴム会社、煉瓦会社、印刷会社などの重役）。金次郎は、次男のところに身を寄せ、地元の人々に最後まで農業指導を行い、大正 11 年 3 月 18 日 72 歳で開拓者として生きた生涯を終えた。

義三のこと

さて、金次郎の三男 義三と四男 四楼は、日本に残った。四楼は、陸軍士官学校を卒業して津軽要塞司令部 苦米地四楼少将となる。一方、義三は、明治 28 年札幌中学に入学して、卒業後は、東京高等工業学校（応用化学科専攻）に進学した。在学中に次兄の事業が失敗して、仕送りが途絶え、大変苦学したがなんとか卒業にこぎつけ、明治 36 年大阪の阿部製紙合資会社に技手として入社する。その後、職場のストライキを指導したことで解雇され、つぎに大阪硫曹株式会社に入社するが、2 年後退社して、人造肥料共同販売株式会社に入社する。それもつかの間、翌年会社は解散してしまう。ところが同年、一度は解雇された大阪硫曹株式会社に復職をして、東京営業所所長となる。明治 43 年大阪硫曹株式会社は、東京人造肥料会社と合併して大日本人造肥料株式会社と改称、同社調査係主任となる。東京人造肥料会社は、創業明治 20 年、高峰讓吉・渋沢栄一・益田孝らが創設したわが国初の化学肥料製造会社である。義三は、大正 2 年からは台湾肥料株式会社の事務も囑託され、以降は大日本人造株式会社と台湾肥料株式会社（取締役）の両方の仕事を兼ねていく。

戦時中は、郷里（青森県上北郡藤坂村字相坂字長漕）に疎開し農耕に従事していたが昭和 21 年 4 月衆議院議員選挙に立候補して当選する。以後、衆議院議員当選 3 回、参議院議員当選一回し、片山内閣で運輸大臣、芦田内閣で国務大臣兼内閣官房長官を歴任する。

義三は、会社勤務時代の昭和 5 年、渋沢栄一が亡くなる前年、父親である金次郎の碑文を書いてくれるように頼んだ。故郷三本木の大恩人であり、義三の勤める会社の創業者である渋沢栄一は、三本木の偉大なる開拓者に対し敬意をこめて快諾し、それが絶筆となった。

碑文

金次郎翁八旧盛岡藩士ニシテ 世々奥州北郡相坂村ニ住ス 幼ニシテ父ヲ失ヒ 年少家政ヲ整理シ 又村政ニ携ハル 壯年ニ及ビ夙ニ宇大ノ大勢ヲ察シテ 南米殖民ノ 大志アリ 明治二十年自ラ北海道未開ノ地ヲ踏査シ 遂ニ開墾ノ意ヲ沢シテ地ヲ後志川沿岸大谷地 蘭越ニ相シ 同二十三年陽春全家ヲ挙ケ同志ヲ率ヒテ移住シ 寒威瘴癘ヲ拓キ 惡獸ヲ 退ケ 具サニ衆ト共ニ慘憺タル辛苦ヲ嘗メルコト拾余年 遂ニ開拓ノ目的ヲ達成シタリ 誠ニ郷土創成ノ恩人ナリ 翁八人格識見高邁ナルニ加ヘ 徳操仁慈人ニ優レ

実践躬行 範ヲ衆ニ垂ル 其高德偉積八正ニ此地ト悠久ヲルベシ 茲ニ碑ヲ建テ記念ス

昭和 5 年 8 月 岡稔謹書

義三の蘭越再訪

昭和 33 年 2 月、義三は、札幌中学創立 60 周年記念に招かれた。蘭越町に立ち寄り、渋沢栄一の絶筆となった父の記念碑を訪れた。“昔の我が家から見た羊蹄山の当時の頃と同様、まことに美しい眺めであった”(北海タイムス昭和 33 年 2 月 2 日)

高等小学校を出たばかりの子供が、たった一人で見知らぬ原野に立つ父の小屋にたどり着き、わずかな期間ではあったが、毎日薪を作り、熊におびえながら入植者に郵便物を配って回った日々を懐かしく思い出したことだろう。

文中に記した以外で参考にした文献

「蘭越町史」、「郷土探索 22 号」(蘭越町郷土史研究会)、「十和田市、三本木原開拓と新渡戸三代の歴史ガイドブック」(太素顕彰会)、「藤坂村誌」(藤坂村役場経済更生委員会)、「苫米地金次郎氏追懐録」(加藤源三著)、「和耕苫米地義三伝」